

## 第五章 八号作戰計畫

### 第一節 計畫立案の経緯

本章に掲げる計畫は一研究案たるに過ぎずして正式の計畫として實現を見ることなく終つたものである。茲に詳述する所以のものはこの案が滿洲に於ける対ソ作戰計畫研究上の好資料となるものと考へるからである。八号作戰計畫といふのは一九三八年から翌一九三九年に亘り大本營作戰部及關東軍參謀部に於て研究立案せられたもので「昭和十八年（一九四三年）対ソ作戰計畫」の秘匿名である。

當時歐洲に於ては獨逸が勃興してオーストリアを併呑しチエコスロバキヤに進入して対ソ問題を解決し得る機會の到来も遠からざるを想はしむる情勢であつた。極東に於ては日本軍漢口、廣東を攻略して作戰による日華事變解決の段階を終り爾後は持久態勢を採りつゝ主として政略による解決策に期待せざるを得ざる時期に到達しつゝあつた。此に於て大本營としては何時までも日華事變に拘泥することなく當時充

実中なりし軍備の重点を速に滿洲に転向し斷乎たる對ソ決戰態勢<sup>七八</sup>を整へて次期情勢に備へることを期待した。一方對ソ作戰計畫自体としては第三、第四章に記述した一九三三年以後の對ソ東方攻勢計畫は逐年に亘る日ソの兵備充実により情況著しく変化し一九三八年頃には對ソ作戰計畫に関して根本的檢討を加うるの要あるに至つた。此の如き基礎の上に立つて研究せられたものが即ち八号作戰計畫であつた。

この計畫に於ては戰備の充實を五ヶ年計畫となし五年後の一九四三年に應ずる將來案を研究した。

この研究に於て大本營作戰部は作戰方針として左の如き甲、乙二案を得た。

甲案 日本陸軍は開戰後速かにウスリー州及黑龍州方面の敵に對し同時二正面作戰を以て之を撃滅し次いで大興安嶺方面の敵を撃滅する。

H表

本案の場合に於ける彼我の集中關係をH表の如く想定する。

| 方<br>面 | 区<br>分 |   | ソ軍（六〇箇師團）   |      |      | 日本軍（五〇箇師團）  |      |      |
|--------|--------|---|-------------|------|------|-------------|------|------|
|        | 時<br>期 | 分 | 開<br>戦<br>時 | 二箇月後 | 三箇月後 | 開<br>戦<br>時 | 二箇月後 | 三箇月後 |
| 東正面    |        |   | 一五          | 二〇   | 二〇   | 一二          | 二〇   | 二〇   |
| 北正面    |        |   | 六           | 一二   | 一五   | 八           | 一三   | 一三   |
| 西正面    |        |   | 九           | 一八   | 二五   | 三           | 八    | 一五   |
| 未集中兵團  |        |   | 三〇          | 一〇   |      | 二七          | 九    |      |

乙案 日本陸軍は開戦と共に主力を以てザバイカル州方面に於て敵軍主力を撃滅する。

本案の場合に於ける彼我の集中關係をI表の如く想定する。

I 表

| 方<br>面 | 時<br>区<br>分 |   | ソ軍 (六〇箇師團) |      |      | 日本軍 (四五箇師團) |      |      |
|--------|-------------|---|------------|------|------|-------------|------|------|
|        | 期           | 分 | 開戦時        | 二箇月後 | 三箇月後 | 開戦時         | 二箇月後 | 三箇月後 |
| 東正面    |             |   | 一五         | 一八   | 一八   | 五           | 八    | 一〇   |
| 北正面    |             |   | 六          | 一二   | 一二   | 三           | 八    | 一〇   |
| 西正面    |             |   | 九          | 二〇   | 三〇   | 一五          | 二〇   | 二五   |
| 未集中兵團  |             |   | 三〇         | 一〇   |      | 二二          | 九    |      |

大本營は右の兩案を關東軍に内示し兩案採用の場合に於ける具體的準備に關し意見を求めた。

關東軍に於ては兩案に關し研究を重ねたる結果乙案を可とする結論を得一九三九年五月關東軍參謀長上京して答申する所があつた。

大本營に於ても計畫としては乙案を希望したが陸軍省と合同研究の結果乙案採用の爲には(1)附圖第五の如く鉄道の整備をなすこと(2)自動車

約二〇万噸を準備すること(5)多量の作戦資材をホロンバイル方面に集積し置くを要することが前提条件とならざるを得ないとの結論を得た。而して之等の条件は当時の全般情勢特に日本の国力よりして当分実現の見込なきものと判断し関東軍の意見具申に對しては具體的作戦準備の基礎として今直に本案を採用すること不可能なる旨回答した。その後ノモンハン事件の勃発、之に次ぐ大本營作戦部及関東軍首腦部の交渉により乙案採用の主張は消滅した。爾後大本營は甲案に基き作戦準備を進めたが日米關係の逼迫に伴ひ之亦沙汰止みとなつた。

## 第二節 八号作戦計畫に関連する問題点

八号作戦計畫の研究に方り特に検討せられた問題を擧ぐれば左の如くである。

之等諸問題の多くはこの時期に至つて始めて検討を加へられたもので  
 はなく既往に於て研究し來つた事項でもあつた。

### 第一款 分断作戰の意義

ソ軍はウスリー州の政戰兩略の要域を確保するため滿洲國の外周を繞つて延長二、〇〇〇軒に及ぶ極東鐵道により歐蘇と連絡している。ウスリー州の防備は戰備の充實により逐年強化せられたが後方連絡は依然在滿日本軍の脅威に暴露されている。ハバロフスクより以西漠河對岸附近に至る一、二〇〇軒の極東鐵道はソ滿國境より五〇乃至一〇〇軒を距だてゝいるに過ぎないのでこの鐵道を直接掩護する爲一〇〇軒に一箇師團の割合を以て守備兵力を配置すれば約一二箇師團を釘付にするとゝなる。此の如き態勢にあるが故にソ軍は開戦と共にこの方面より攻勢を執り少くも北安、嫩江附近まで進出して後方連絡線の安全を図るであらう。このソ軍態勢上の弱点に乗ずる爲日本軍は隨所に黑龍江を渡河して極東鐵道を分断し東正面作戰に策應する如く準備してきた。

(28)

一九三八年頃には挺進部隊の使用のみを以てする成果の不十分を補うため有力なる兵團を以て黒龍江を渡河し当面の敵を撃滅して分断の確実性を求めんとした。

八月作戦計畫甲案に於ては北正面の日本軍兵力を常にソ軍よりも優勢ならしむる如く立案し黒龍江を渡河して該方面のソ軍を撃滅し分断を完うせんとするものである。

(註二八) 日本軍は極東鉄道分断の爲挺進隊の使用、江上艦隊を以てするアムール河橋梁の破壊等を計畫してゐた。

この計畫は北安―黒河鉄道の完成に伴ひ孫吳附近に一箇師團を配置し又黒河、孫吳附近に築城を実施するに及び具体化し且成功の自信を得るに至つたものである。

## 第二款 北方攻勢の価値

東方攻勢と同時に北方攻勢を企図する場合十數箇師團の渡河作戦並に

之が後方補給を繼續する爲の諸準備及渡河後の濕地通過の裝備等を完  
 備すると共に渡河作戰を容易ならしむる爲航空勢力の優勢、長距離火  
 砲の優越等を期する必要があり之等に応ずる作戰準備に相當の努力を  
 払ふこととなる。

渡河作戰概略の構想としては一部を以て奇克附近、主力を以て黒河及  
 その西方地区より渡河しゼーヤ河東西の地区を席捲してクイブシェフ  
 西方地区にて敵を捕捉殲滅すると共に各一部を以て佛山、烏雲、呼瑪  
 陽浦、漠河附近より渡河し極東鐵道を遮断し隨所に敵を分断して捕捉  
 殲滅せんとするものである。

然るに一九三七年頃より極東鐵道の北方二〇〇乃至三〇〇軒の地域に  
 之に平行してバム鐵道敷設せられつゝありとの情報あり、且ゼーヤ河  
 プレーヤ河上流地区に軍事施設をなす等北正面の配備も漸次縱深に及  
 びつゝあり、極東鐵道の分断のみを以て果して東及北正面の敵捕捉の目  
 的を達し得るや否や。如之極東ソ軍の軍需物資の貯藏増加による持久

期間の延長をも考慮せざるべからざる状況に於て多大の犠牲を払つて北方分断を企図するも十分なる効果を期待し得るや否や。日本軍が北方に攻勢を執り未だ成果を収め得ざる期間内に西正面の持久作戦に破綻を来し敵軍主力が齊々哈爾、奉天方面に突進し来る時は北正面に敵の退路を遮断せんとする日本軍が却つてソ軍の襲中に入り後方を分断せらるゝ結果とはならざるや。之等が戦略的に考究すべき重要な問題であつた。西正面に攻勢を執らんとする八号作戦計畫乙案を採らんとする論者の甲案に對する反對意見は概ね右に述べたる諸点に不安を抱き成算を持ち得ずとするにあつた。

### 第三款 ソ軍の滿洲に於ける作戦企図判断

日本軍が年来企図し続けて来た東方攻勢案を一九三八年に至り変更せんとするに至つたのは多分に當時に於けるソ軍の企図に関する判断に影響されてゐた。その考察は次の如きものであつた。

外線の戰略態勢を占むるソ軍は東、北、西の三正面から攻勢を執り主  
 力を以て北滿平地に、一部を以て南滿平地及北鮮に進出して日本軍主  
 力を撃滅するを以て作戰第一段階の一般方針とするであらう。之が爲  
 平時より滿洲に在る日本軍の二倍以上の兵力をバイカル以東に保有し  
 航空機及潜水艦を以て日本軍の集中を妨害すると共に自己の歐ソより  
 の集中を促進し日本軍に各個撃破の余裕を與へざる如く努めるであ  
 る。

ソ軍は滿洲の東正面に於て日本軍主攻勢の企圖顯著となるに及んでこ  
 の方面の防備を益々強化し在極東兵力の約半数を該方面に保持して日  
 本軍主力を拘束し歐ソより輸送せらるゝ兵力を北及西正面に投入して  
 の進攻を図らんとするやに判断せられた。この場合に於ても一部を以  
 て北鮮方面に突進して日本軍の集中を妨害せしめ又松花江、穆稜江に  
 沿ひ佳木斯、密山方面に進出して自軍後方連絡線の掩護に努むると共  
 に北正面攻勢に策応することを企圖するであらう。

北正面に於ては一九三三年乃至一九三五年頃にあつては専ら攻勢を企図しある如く判断せられたがその後には防勢を企図する如く判断せられた。そして日本軍主力を北方に誘致して東西兩正面より夾撃せんとするが如き意図なきやを疑はしむるものがあつたが、いづれにしても外線的戦略態勢を有効に活用せんとする攻勢的戦備は決して怠つてはいないものと見られていた。西正面國境に於けるソ軍の兵力配置は東正面の如く強力でなく防禦陣地亦貧弱にして集中掩護陣地程度の施設の外見るべきものがなかつた。一方機甲兵團、騎兵師團の如き機動性ある打撃兵團をザバイカル州より外蒙に亘り配置して居り長驅北滿進攻を企図しているが如く觀察せられた。(29)

(註二九) 一九四五年八月の開戦時に於けるソ軍の攻勢はこゝに述べたよゝな要領に於てされた。

ソ軍の對日作戰使用兵力は主としてシベリヤ鐵道の輸送力に基き判断せられ日本參謀本部としては一九三四年前後四〇箇師團、一九三八年

前後五〇箇師團と判断して居り八号作戰計畫の目標年度たる一九四三年頃には六〇箇師團となるであろうと判断していた。そしてその集中速度は極東常駐兵力の増加、輸送力の増強等により逐次短縮し一九四三年頃には約三箇月を以て右兵力の集中を完結するものと見られていた。この集中速度は歐ソよりの輸送兵力を東、北、西の三正面に概ね平等に投入する場合である。假に投入兵力の大部を東正面に輸送するとしても輪転材料の数及カルイムスカヤ以東の輸送力により制限を受け東正面に三五箇師團を保持することは困難で且多くの時間を要することとなる。又假に西正面に成るべく多くの兵力を投入せんとしても滿洲里支線が單線である關係上莫大なる自動車輸送の併用を必要とし全兵力の半数以上をこの方面に用いることは困難であろうと考へられていた。之を要するに日本軍としてはソ軍が東、北、西の各正面より攻勢を執り来ることを豫期していたが同時に非常に公算の多い策案として東正面又は東、北正面を初期拘束正面として持久を策し西、北

正面又は西正面を攻勢正面として大規模進攻作戰を採り來ることが考へられた。

#### 第四款 大興安嶺以西の作戰的觀察

大興安嶺はその脊梁に於て標高一〇〇〇乃至一七〇〇米を有し東側斜面は比較的急峻であるが西側斜面は傾斜緩にしてホロンバイル高原に連接し西方よりの行動は容易である。

索倫以北には部隊を通ずる道路四條（註一八参照）を発見し得るに過ぎないのでこの方面に作戰を見る場合彼我の主力は鐵道網の關係上北滿鐵道及索倫鐵道方面に指向せらるべく他の二條の道路（嫩江―奈勒穆圖道及塔爾斯興安峠道）は一部の作戰路となるであろう。然るに索倫以南赤峰附近に至る約五〇〇軒の正面は大波狀の平原をなし内蒙の高原から漸次降下して南滿の平地に連接し到る所機械化部隊の戰場となり得る。内蒙、外蒙及ホロンバイルは共に機械化部隊の行動が容易

である。

九〇

ウランバートル、張家口（又は包頭）間は概ね一〇〇〇軒、サンペー  
ス、奉天間亦約一〇〇〇軒であるが滿蒙國境から奉天までは僅かに四  
〇〇軒に過ぎない。開戦に先だちソ軍が東烏珠穆沁、西烏珠穆沁附近  
に作戦基地を進む時は南滿は容易に脅威せらるゝこととなる。此の  
如く觀察すれば西正面の作戦正面は約一、二〇〇軒に及び小數の兵力を  
以てしては敵の進攻を阻止することは困難である。

一九三六年以前の作戦構想に於ては当時ソ軍機械化の程度微弱であつ  
たので開戦初頭海拉爾以西約一六〇軒の鐵道軌道を破壊し海拉爾に一  
箇師團程度の築城を施し所要の増援をなすことによりソ軍の長驅挺進  
を一時阻止することが出来るものと考へていた。

一九三八年頃に於てはソ軍の機械化向上し海拉爾の如き一地点の確保  
を以てしては到る所から溢出進入を受け機動性ある反撃威力を持つて  
あらざれば廣正面の防禦は不可能となつてきた。

一九四三年頃となれば右の傾向は更に増大し大規模なる築城の利用と有力なる機動兵團の反撃作戰以外には西正面持久の方策はないものと考へられた。

八号作戰計畫甲案に於ては東、北正面に兵力の優勢を保持する爲西正面著しく劣勢となりソ軍の突破阻止に不安があり同乙案に於ては西正面初頭主力を以て北滿鐵道方面より敵主力の集中未完に乗じて攻勢を執るので日本軍の側面は自然に掩護せらるゝこととなる。

ホロンバイル平原以西の地形はネルチンスキーザボード、ボルヂヤ、カルイムスカヤ、スレーテンスク間の正面及縱深各々約二〇〇軒の地域は概ね大兵團の作戰可能である。その以北及以西は密林にして大兵力を使用し難いのでスレーテンスク、カルイムスカヤの線に進出して極東鐵道を分断し得れば爾後チタを経てウランウデ附近迄は三条の作戰路の外は大兵團の作戰正面なき森林に蔽はれた山地である。之等の長隘路突破に當つては南方ウランバードル方面よりする繞同作戰か意

義極めて大である。バイカル湖北側地区は作戰に適する進路を求め得  
ない。

### 第三節 八号作戰計畫乙案

#### 第一款 八号作戰計畫乙案の大綱

##### 第一 作戰方針

日本陸軍は極東に於けるソ軍を撃滅しバイカル湖以東の要域を占領する。之が爲速かにザバイカル州方面の敵主力軍を撃滅する。

##### 第二 作戰指導要領

一、西正面軍（二〇箇師團及機械化五箇師團基幹）は主力を以て奈勒穆圖方面よりネルチンスク方面に向ひ攻勢を執りチタ以東に於て敵主力軍を撃滅する。爾後ウランウデ及ルフロウ方面に戦果を擴張してバイカル湖以東ザバイカル州及外蒙の要域を占領する。

二、北正面軍（一〇箇師團基幹）は主力を以て黒河以西の地区より攻勢を執り黒龍州方面の敵を撃滅して黒龍鐵道を分断する。爾後ルフロウ及ハバロフスク方面に戦果を擴張する。

三、東正面軍（一〇箇師團基幹）は当初ウスリー州方面の敵に對し持久を策し爾後当面の敵を撃滅してウスリー州の要城を占領し且ハバロフスク方面に戦果を擴張する。

四、北支那方面軍は張家口、包頭方面より西正面軍の作戰を容易ならしめる。

五、航空軍（三五〇箇中隊）は開戦勢頭海軍と協力しウスリー州方面の敵航空戦力を撃破し次で主力を以て西正面軍の作戰に協力する。爾後の作戰は状況に應じ之を定める。

### 第三 作戰要領

一、第一期（チタ東方主決戦の時期）の作戰を左の如く豫定する。

ノ西正面軍は開戦と共に在滿兵力を以て敵を撃破しつゝ、國境を超え

九四  
 てガジームルスキーザボード、アレクサンドロフスキーザボード、  
 ボルヂヤの敵陣地前に進出し概ね動員第三十日約一五箇師團の集  
 結と共に攻勢を開始する。此の間一部を以てサンペーズ方面に對  
 し正面軍の左側背を掩護せしめる。後方兵團の到着に伴ひ逐次之  
 を戦線に投入し來着する歐ソ兵團を逐次撃滅しつつスレーテンス  
 ク、ネルチンスク、カルイムスカヤの線に進出<sup>ル</sup>タ以東に於て敵  
 を捕捉撃滅する。此の間通遼方面、南滿に繞回侵入を企図する敵  
 に對しては航空部隊と協力し内地よりの後続兵團を以て壓壊する  
 に努める。

ふ北正面軍は開戦と共に黒龍江沿岸陣地を利用して敵の進攻を阻止  
 すると共に挺進部隊を佛山、烏雲、鷗浦、漠河方面より潛入せし  
 め黒龍鉄道を遮断して敵兵力を分散せしめ概ね開戦二箇月末八箇  
 師團の集結を待つて主力を以て黒河、呼瑪の間より黒龍江を渡河  
 しスワボードヌイ方面に進出して黒龍州方面の敵を撃滅し黒龍鉄

道を分断する。

3. 東正面軍は国境築城を利用し密山以南に於ては国境線に於て同以北に於ては密山、寶清、富錦以東の滿領地帯に於て攻守併せ行い持久を策する。

4. 北支那方面軍は張家口、包頭附近を確保して華北の治安を維持すると共に一部を以てウデムチン、烏得方面に作戦し敵機動部隊の南滿進入を妨害して西正面軍の作戦を容易ならしめる。

5. 航空軍は主力を以て先づ北鮮及東滿に展開し開戦劈頭海軍と協力してウスリー州方面の敵航空戦力を撃破し次で一部を以て戦果を持続すると共に主力を以て海拉爾方面に転進し西正面軍の主作戦に協力する。

6. 第二期（戦果擴張より嚴冬期に入る迄の間）の作戦を左の如く概定する。

7. 西正面軍は引続き有力なる一部を以てウランウデ、買賣城の線に

向ひ追撃を続行し敵をして整齊たる抵抗をなし得ざらしめ全機械  
 化師團を集結使用してサンペーズ方面よりウランバードルを経て  
 ウランウデに繞回追撃せしめる。

又別に一部を以てルフロウ方面に戦果を擴張し北正面軍に策応す  
 る。爾余はチタ以東の地区に集結し東又は北正面への転進を準備  
 する。此の間嚴冬期に入る場合はチ、ハル、ハルビン、奉天間の  
 地区に集結待期せしめる。

2 北正面軍は戦果をゼーヤ、ブレイヤ河上流域に擴張して殘敵を  
 掃蕩すると共に一部を以てルフロウ方面に向ひ作戰し西正面軍に  
 策応する。特に有力なる一部若くは主力を以てハバロフスクに向  
 ひ作戰し当面の敵を殲滅して之を占領する。此の間嚴冬期に入る  
 場合には適時現戦勢を保持しつつ、明春を待つの態勢に移る。

3 東正面軍は西及北正面軍の戦果を活用して適時攻勢に転じウスリ  
 州の敵を殲滅して要地を占領し次で北正面軍に策応してハバロ

フスクに向ひ作戦を進める。

北支那方面軍は機動兵團を以て包圍よりウランバートル方面に作戦せしめ西正面軍のウランバートル占領に策應する。

第二款 八号作戦計畫乙案に應ずる平時準備

一、對ソ戦時兵力として一般師團四〇箇、機械化師團五箇を左の如く準備する。

第一次兵力は丁表の如くてある。

丁表

| 地域  |     | 方面   |       | 兵團 |  |
|-----|-----|------|-------|----|--|
| 東正面 | 北正面 | 一般師團 | 機械化師團 |    |  |
| 四   | 三   |      | 一     |    |  |

右表の兵力は準戦時編制とし動員第三十日迄に戦場に到着し得る如くする。

依然満洲の東正面及北正面に敵を牽制し置く爲この方面の兵力を有力ならしめ西正面には大なる兵團を配置することなく主力は之を満洲中央部及朝鮮、華北に準備する。

第二次として内地及中国方面より一三箇師團を動員第六十日迄に戦場に到着せしめる。

| 計  | 華北 | 朝鮮 | 満洲   |      |     |    |
|----|----|----|------|------|-----|----|
|    |    |    | 南満平地 | 北満平地 | 西正面 |    |
| 一八 | 三  | 三  | 二    | 一    | 二   | 九八 |
| 五  |    |    | 二    | 二    |     |    |

第三次として主として内地より九箇師團を動員第九十日迄に戦場に到着せしめる。

滿洲に於ける鉄道は從來東及北正面に於て濃密に施設せられて居たが依然東及北正面を擴充すると共に最小限の戰略鉄道を左の如く北方及西方に新設する。(附図第五參照)

縣 吳 一 遼河線

嫩 江 一 鷗浦線

嫩 江 一 吉拉林線(森林鐵道として企図を秘匿するに努め)

牙克石 一 奈勒穆圖 一 黑山頭線(牙克石、奈勒穆圖間は平時は路

盤のみとする)

阿爾山 一 海拉爾線

### 三、築城

東正面に於ては一般に築城を強化し特に密山、寶清、富錦附近に新設する。北正面に於ては佛山、烏雲、呼瑪、鷗浦附近に新設する。

西正面に於ては奈勒穆図、滿洲里間及アルグン河岸要線に輕易なる  
集中掩護の施設を行う。

#### 四 飛行場

東正面及西正面に對する飛行場を擴充すると共に西正面に對して海  
拉爾飛行場群を強化し奈勒穆図、將軍廟附近に秘密飛行場を設定す  
る。

#### 五 部隊の編制

一般に自動車化を促進する。

#### 第三款 八号作戰計畫乙案に對する觀察

一 徹底せる軍の機械化のみがこの計畫の實現を可能ならしめる。

滿洲國境地帯に於ける作戰準備上の難点は各方面とも未開發なこ  
とである。未開發地域に於ては軍の展開、軍需品の集積、端末の輸送

等に要する諸施設を悉く軍自体に於て準備するを要し且企圖の秘匿を著しく困難ならしめる。

この傾向は西正面に於て最も顯著にして日本軍が西正面攻勢案を採用する場合にどうしても不毛沙漠地帯を克服せねばならない。

即ち

1. 攻勢兵團は興安嶺を通過して迅速、穩密にホロンパイルの不毛地帯に展開し且莫大なる補給を持続するを要する。

2. 不毛地なると同時に極寒地なる爲冬季の寒冷が作戦を拘束し開戦時機の選定宜しきを得、作戦速度の劃期的増大を必要とし而も万一の場合を顧慮して越冬の對策を樹立して置かねばならない。

3. 前二項の条件を充す爲には機動力を発揮し得る爲軍の機械化を必要とし之さへ実現すれば東正面及北正面に比し寧ろ潑刺たる作戦を実施することが出来る。

4. ホロンパイル方面の主作戦が平押し作戦とならない爲に蒙古方面

よりする包圍、迂回作戰を併用するを要し蒙古作戰亦軍の機械化を絶對の要件とする。

以上の考察よりすれば滿洲西方面の作戰は一にも二にも軍の機械化を必要とし機械化せられたる場合に於ては国境地帯の作戰準備は之を最少限に止め主力軍を興安嶺以東に集中したる後一舉に不毛地帯を通過して敵陣地前に現出することが可能となる。かくして時間的に、距離的に又戰略的に廣漠不毛地帯を征服することが出来る。

二、西正面攻勢案は東正面攻勢案に比して更に強大なる航空戦力を必要とする。

東正面攻勢の重要目的の一は日滿に亘る我方の策源、連絡線及日本内地を脅かすソ軍空海の基地たる沿海州を迅速に制壓するにあつた。西正面攻勢案採用の場合に於ても東正面に於ける右の要請には変化がない。

而も西正面に於て機械化大兵團を以て廣漠地に迅速なる決戦を敢行

する場合此に強大なる航空の協力を要することも亦明かなことである。

八号作戦計畫乙案の構想は先づ日本軍航空の主力を以て沿海州方面に敵航空戦力の殲滅を期しこの間西方面に於ては攻勢を準備し次で航空の主力を転用して西正面の地上攻勢に協力せんとするものである。

この場合沿海州方面に於ける航空殲滅戦の成果徹底せざる限り一顧をこの方面に残置することとなり西正面には強力なる航空戦力を充當するを要し結局航空総兵力の強大なるを必要條件とするに至る。

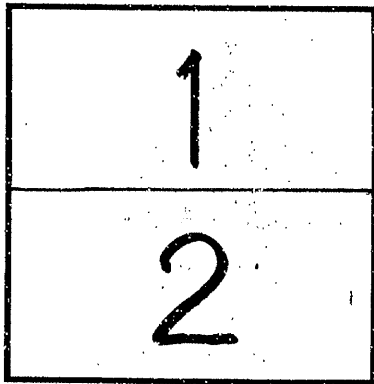
### 三、日本軍の西正面作戦に對する研究準備

一九三八年に大本營が八号作戦計畫の研究に着手したる結果軍の機械化及航空の劃期的増強の必要を痛感したのであつたが之より先一九三七年より陸軍は新軍備充實計畫を決定發足し本計畫の内容は八号作戦計畫に基く兵備上の要求とは距離遠きものがあつた。當時頃

までに於ては統帥部の西正面に對する研究が十分ならざるものかあつたがこの方面の作戰研究を事實を以て強制したるものは一九三九年に生起したノモンハン事件そのものであつた。

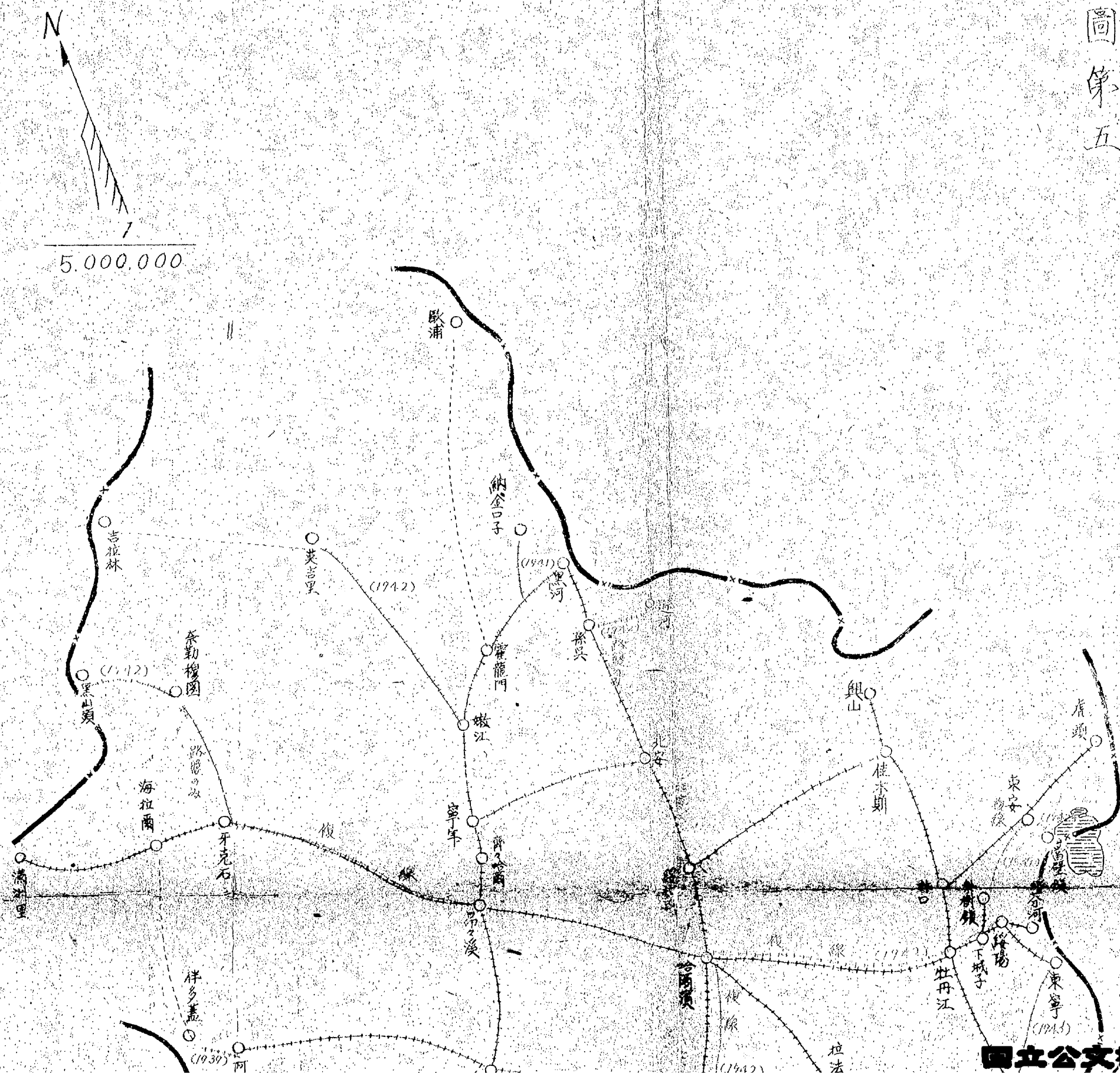
ノモンハンの戰鬪はホロンバイルに於ける不毛廣漠地の作戰様相に明なる基準を與へ、將來この方面に大規模なる近代戰が展開せらるゝことあるべきを示唆したものであつた。しかしながら當時に於ける日本の國力は八号作戰計畫乙案の採用に應ずる軍の編制、軍需産業及現地戰備を實現することを許さないうゝ實狀にあつた。

## 分割撮影ターゲット

|                       |                                                                                     |
|-----------------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| 分割した<br>部 分 の<br>撮影順序 |  |
| 分割撮影<br>した理由          | A 3 版以上のため                                                                          |
| 文 書 等 名               | 8号作戦計画乙案に反する<br>鉄道整備計画図                                                             |
| 上記のとおり分割撮影したことを証明する。  |                                                                                     |

八號作戰計畫乙案に應ずる鐵道整備計畫圖  
(1939年～1940年立案)

附圖第五



**国立公文書館 アジア歴史資料センター**  
Japan Center for Asian Historical Records  
<http://www.jacar.go.jp>

